

平成 24 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

インターネット依存傾向と
家族機能との関連

所属系 健康科学系

氏名 平塚 健太

論文指導教員 島内 憲夫

合格年月日 平成 25 年 2 月 25 日

論文審査員 主査 田中 純夫

副査 山岸 明子

副査 島内 憲夫

目次

第1章 緒言.....	1
第2章 文献考証.....	3
第1節 概念規定（定義）.....	3
(1) インターネット依存傾向とは.....	3
(2) 家族機能とは.....	3
(3) 凝集性とは.....	4
第2節 インターネットの普及率.....	4
第3節 インターネットがもたらす影響.....	4
第4節 子どもと家族機能.....	5
(1) 中学生の発達段階と家族.....	5
(2) 家族機能に関連した研究.....	5
第5節 インターネット依存と家族の関係.....	6
第3章 目的.....	8
第4章 方法.....	9
第1節 調査対象.....	9
第2節 質問紙の構成.....	9
(1) 情報機器の利用に関する項目.....	9
(2) インターネット依存傾向尺度：戸部ら ³²⁾	9
(3) 家族機能測定尺度（FACESIII）：草田・岡堂 ¹²⁾	10
第5章 結果.....	12
第1節 生徒の情報機器所有とインターネット利用状況.....	12
(1) 情報機器の所有率と利用場所.....	12
(2) インターネット利用時間.....	13
(3) 利用しているウェブサービス.....	14
第2節 家族機能.....	15
(1) 学年・性別でみた凝集性.....	15

第 3 節 インターネット依存傾向および家族機能とインターネット利用状況との関連	16
(1) 情報機器の種類別にみた関連	16
(2) 利用場所別にみた関連	16
(3) ウェブサービス別にみた関連	17
第 4 節 インターネット依存傾向と家族機能との関連	19
(1) 性別・学年別にみた関連	19
(2) インターネット依存傾向と家族機能との関連	19
(3) 凝集性の 4 群別での比較	20
(4) 項目別にみた関連	21
第 6 章 考察	23
第 1 節 中学生のインターネット利用状況	23
(1) 情報機器の所持率およびインターネット利用率	23
(2) 利用場所および利用時間との関連	23
(3) ウェブサービスとの関連	24
第 2 節 中学生が視る家族機能	25
第 3 節 インターネット依存傾向と家族機能との関連	25
(1) 性別・学年別	25
(2) 凝集性との関連	26
第 4 節 今後の課題	27
第 7 章 結論	29
文献	30
謝辞	33
Summary	34

第1章 緒言

平成23年度通信動向調査²⁶⁾の結果によると、平成23年の1年間にインターネットを利用経験者数は推定で9,610万人、人口普及率は79.1%とされている。平成13年度の利用経験者数5,593万人、人口普及率46.3%と比べると、10年間で劇的に急増していることがわかる。また、年齢階級別インターネット利用率の推移(個人)においては、6-12歳で61.6%、13-19歳では96.4%と非常に高く、中学生と高校生の年齢層においてインターネットを高い割合で利用している状況にあることが伺える。

今日、インターネットは、あらゆる情報を手軽に収集できることから生活に必要不可欠なものとなりつつある。また、教育現場においても教材として普及し、様々な場面で活用され始めている。このようにインターネットは、大人のみならず子どもの学習に有効な学習技術を与える一方で、それらがネガティブな影響を与え得ることが報告されている。Krautら¹⁰⁾は、インターネット利用により、家族間のコミュニケーションが減少したこと、社会的なつながりが狭くなったこと、憂鬱感と孤独感が増加したことを明らかにしている。日本においても、情報機器の中学生への浸透に焦点を当てた研究¹⁸⁾から、中学生の空間と情報装置の個別化による自室滞在時間や自室内のテレビ視聴時間の長さが、父親との関係の希薄化につながり、父親との関係形成に影響を及ぼしていることが報告されている。このようにインターネットが及ぼす悪影響は、成人のみならず子どもにおいても看過できない問題といえよう。そして、このような実態から、近年では、「インターネット依存」という状態が注目されている。

インターネット依存とは、「インターネット使用者のコントロール不能な状態、インターネットにはまっている時間が増大していること、弊害が生じているのにもかかわらずやめることができない状態」(Young, 1998)^{35) 36)}とされ、インターネット先進国であるアメリカや韓国では、インターネット依存により社会的不適応を起こす人々の増加が社会的問題となっている。

とりわけ日本においては、インターネット依存は、男性8.3%、女性7.7%となっており、さらに若年層に頻度が高いことが報告されている²⁴⁾。戸部ら³²⁾は、児童生徒を対象とした研究において、インターネット依存傾向とメンタルヘルス、心理・社会的問題性との関連を検討し、依存傾向が高いほど心理・社会的状態が望ましくない傾向を示すことを明らかにした。また、財団法人コンピュータ教育開発センターの研究³⁵⁾で

は、子どものインターネット依存傾向と家庭との間に相関があることを報告している。

さらに文部科学省は、ネットの課題は日々変化、進展しているとし、実態の把握は、社会単位、学校単位、家庭単位のそれぞれの単位で継続的に行う必要があるとしている¹⁵⁾。しかしながら、日本におけるインターネット依存研究の多くは、大学生や成人を対象に行われており、子どものインターネット依存と家族に関する知見は乏しい。そのため、インターネット依存にある子どもとその家族がどのような状態にあるのかを把握することが喫緊の課題となっている。

家族研究や家族療法学の視点から、アルコール依存症、摂食障害、非行、いじめ、不登校、といった様々な問題が、単なる個人的な問題ではなく家族全体の問題あるいは家族と地域社会との関係の問題であると考えられている¹¹⁾¹²⁾ことを考慮すると、インターネット依存においても家族の問題が反映されている可能性が十分考えられる。従って、本研究は、家族機能に注目し、インターネット依存傾向と家族機能の関連を検討する。

第2章 文献考証

第1節 概念規定（定義）

（1）インターネット依存傾向とは

1990年代中頃、欧米では、日常生活に干渉をおよぼす程度の、インターネットへ過剰に依存した状態が問題視されるようになった。そして、Goldberg²⁾や Young^{35) 36)}などの精神科医や心理学者によりインターネット依存(Internet Addiction)に関する先駆的研究が行われるようになったのが発端である。

インターネット依存について、Youngは、「インターネット使用者のコントロール不能な状態、インターネットにはまっている時間が増大していること、弊害が生じているのにもかかわらずやめることができない状態」(Young, 1998)と定義しており世界的に多くの支持を得ているようである。

しかしながら、現在、日本におけるインターネット依存は、いくつかの定義が存在しているが小林⁹⁾、文科省¹⁵⁾、鄭³⁰⁾、必ずしも一致しない。その理由として、日本においてインターネット依存は、諸外国ほど問題視されないことや DSM-4-TR や ICD-10 など診断基準において疾患群として認知されていないことから、インターネット依存を「インターネット依存傾向」として捉える方向にあることが挙げられる。鄭²⁸⁾はインターネット依存傾向について、Youngのインターネット依存の定義を踏襲し、「インターネットに過度に没入してしまうあまり、コンピューターや携帯が使用できないと何らかの情緒的苛立ちを感じることに、また実生活における人間関係を煩わしく感じたり、通常の対人関係や日常生活の心身状態に弊害が生じるのにもかかわらず、インターネットに精神的に依存してしまう状態^{35) 36)}」と定義している。そこで本研究は、Youngのインターネット依存の定義を踏襲した、鄭³⁰⁾のインターネット依存傾向の定義を採用することとする。これにより、我が国におけるインターネット依存の研究が国際的にも理解が可能なものになるといえよう。

（2）家族機能とは

家族機能とは、家族員との関係で個人がどのように考え対応する機能に加え、家族の関係性をどのように維持しようとしているのかという家族の機能のことである⁶⁾。

(3) 凝集性とは

家族システム円環モデルは、米国における過去 40 年間にわたる家族研究の成果から演繹的に構成された家族システムに関する中範囲理論仮説である²⁹⁾。円環モデルは、凝集性 (Family Cohesion)・適応性 (Family Adaptability)・コミュニケーション (Communication) という 3 つの次元が家族機能度を決定すると考える。

円環モデルでは凝集性を「家族の成員が互いにもつ情緒的なつながり」と定義し、情緒的な結びつき、連合、意思決定、時間、空間、友人、趣味と余暇などの変数によって測定される。凝集性は高低の度合によって 4 つのレベルによって分けられる。凝集性が非常に低いレベル (遊離)、低いレベルから中間のレベル (分離)、中間のレベルから高いレベル (統合)、非常に高いレベル (膠着) である。

第 2 節 インターネットの普及率

平成 23 年度の通信動向調査によると、インターネット利用者は 9,610 万人、人口普及率は 79.1%と報告されている²⁷⁾。年齢階級別インターネット利用率の推移 (個人) では、6-12 歳において 61.6%となっており平成 21 年度の 68.6%から低下しているものの、その他高齢者も含め利用率は年々高くなる傾向にある。特に、平成 21 年度を境に 12-49 歳において利用率は 9 割を超えており、平成 23 年度には 12-19 歳における利用率が 96.4%と非常に高くなっている。更に利用率を都道府県別にみると、大都市圏を中心に高くなっており、神奈川県 87.5%、東京都 84.1%、埼玉県 82.4%、千葉県 81.4%であることが報告されている。つまり、首都圏の中学生においてインターネット利用率は、地方の中学生に比して高く、インターネット依存に曝されやすい環境にあることが伺える。

第 3 節 インターネットがもたらす影響

近年、インターネットの急速な普及に伴い、学校現場において教育の情報化に関わる内容の充実が図られている。具体的には、学習指導要領の改訂により、情報教育や、教科指導における ICT 活用 (ICT: パソコンや情報通信ネットワークなどの情報コミュニケーション技術) などが行われている。インターネットの教育的効果についての研究では、インターネットの使用によって、子どもの学業・達成面が向上したという結果¹⁹⁾や、友人関係がもたらす孤独感やそれらに対応したソーシャルサポートに対して

ポジティブな効果⁽¹⁾をもたらすと言う、ポジティブな効果が報告されている。

一方で、インターネット利用による孤独感の増加⁽⁶⁾や、精神的健康および社会的適応に悪影響を与える可能性⁽²⁸⁾など、ネガティブな効果も報告されている。高比良ら⁽²⁶⁾は、インターネット使用による影響は、使用時の状況や使用目的によっても大きく変わる可能性がある⁽¹⁹⁾ことを指摘している。また、戸部ら⁽³²⁾は、児童生徒を対象とした研究において、インターネット依存傾向とメンタルヘルス、心理・社会的問題性との関連を検討し、依存傾向が高いほど心理・社会的状態が望ましくない傾向を示すことを明らかにしている。その他、インターネットを利用する人ほど抑うつや孤独感が増加し家族とのコミュニケーション時間が減少し近隣の人との交流も減少する傾向にあることや⁽¹⁰⁾、インターネット使用によりインターネット上での希薄で質の劣る対人関係が増加すること、さらには、身近な家族や友人との良質な対面コミュニケーションが減少する⁽¹⁰⁾など、友人・家族といった人間関係にまで影響を及ぼし得ることが報告されている。

第4節 子どもと家族機能

(1) 中学生の発達段階と家族

中学生の発達段階は青年期や思春期にあたる。思春期において身体における急激な変化と性的機能の充実いわば第二性徴が始まり、その後心理的社会的自立に向かうプロセスの中で、親からの独立と依存の葛藤などを経験する。児童期においては親にある程度密着していた子どもの自我は青年期を通過していく中で、親から分離していく過程を辿っていく⁽¹³⁾。

しかし、思春期の問題は子どもだけでなく家族が抱える問題でもある。思春期の子どもをもつ家族について、北島⁽⁸⁾は「家族発達の中では、思春期は家族がお互いに結びついた状態から、家族同士の距離が遠くなる状態に移行する。家族の相互の親密性を適度に維持しつつ、凝集性を緩めていくという課題の解決をこの時期の家族は求められる。思春期の子どもをもつ家族が最終的に達成すべき課題は、相互の自立、相違を認めた上での友愛的関係である」と述べている。

(2) 家族機能に関連した研究

家族を一つのシステムとみなす立場から家族研究者や家族療法学の発展に伴い、いじめ、不登校、出社拒否、拒食、過食、非行、アルコール依存症といった問題は、単

なる個人的な問題ではなく、家族全体の問題、あるいは家族と地域社会との関係の問題として理解されてきた¹²⁾。

思春期問題発症に関する研究³²⁾では、家族機能が極端な群は家族機能が適切に働かず、暴力、いじめ、非行、家出、シンナー乱用という社会に対して外的に不適応を引き起こす反社会的問題の発生率が有意に高いことを報告している。その一方で、ひきこもり、不登校という社会に対し内的に不適応を引き起こす非社会的行動の発生は、家族機能だけでは説明がつかず、何か他の要因が作用しているのではないかという報告もある³⁴⁾。

中学生の無気力と家族関係を検証した研究²⁴⁾では、家族のきずなと無気力度との関係は、円環モデルが予測するようなカーブリニア関係は観察されず、きずなが低くなればなるほど無気力度が高くなるリニアな関係が認められたことを報告している。

第5節 インターネット依存と家族の関係

日本におけるインターネット依存は、男性8.3%、女性7.7%となっており、さらに若年層に頻度が高いことが報告されている²³⁾。財団法人コンピュータ教育開発センターによると、小中学生において、家族との会話の満足度が低いほど、また、家庭でほっとできないと感じているほど「インターネット依存」傾向が高くなることを報告している。小中学生のインターネット依存傾向は、家庭・親子関係が強く影響を与えていることから、家庭・親子関係が非良好であるほど、「インターネット依存」傾向が高くなることを指摘し、家庭・親子関係が良好であれば、健全なインターネット利用が促されるのではないかと推測している³⁷⁾。

中学生における情報機器の個別所持と家族の凝集性との関連を分析した研究¹⁸⁾によると、中学生の大半が自分の空間を持ち、自分の情報機器を所持しており、結果として家族関係の希薄化に繋がっていること、すなわち家族内での個別化が生じていることが報告されている。この研究から、インターネットにおいても同様のことが想定される。仮に、このような状態が、インターネットにおいても起こり得るとするならば、思春期という依存と自立の境界期に差し掛かる心理的に不安定なこの時期は、インターネット依存に曝されやすい可能性がある。一方、長津¹⁸⁾は、中学生におけるパソコンや携帯電話などの所有率が低いことを報告している。しかしながら、この調査が行われたのは、約10年前となっており、急速なインターネットの普及を考慮すると、現

在（平成 24 年）における中学生の情報機器所有率は、当時に比べ大きな差があることが予想される。世帯の情報通信機器の保有状況（平成 22 年度通信動向調査）は、平成 12 年末と平成 22 年末の結果を比べると、携帯電話・PHS が 78.5%から 93.2%と増加し、パソコンが 50.5%から 83.4%へと急増している。また、世帯のインターネット利用率の動向によると、平成 12 年末の 34.0%が、平成 22 年末では 93.8%と急増している。つまり、情報機器の所有率（保有率）の増加によって、家族社会とその家族関係が大きく変化している可能性があり、中学生の空間と情報装置の個別化、と家族関係（凝集性）との関連について再度検討していく必要があるといえよう。

第3章 目的

本研究の目的は、中学生の情報機器の所時や利用状況を把握し、インターネット依存傾向と家族機能との関連を明らかにするところにある。

第4章 方法

第1節 調査対象

調査の実施にあたっては、2012年9月から10月の間に、千葉県郊外のA中学校に調査を依頼した。調査対象は、中学1年生～3年生とし、1学年につき2学級を抽出して調査を実施してもらった。計183名に調査票を配布し、183名(100%)から回答が得られ、データに欠損のない180名(1年生55名・2年生53名・3年生72名、男子84名・女子96名)を分析対象とした。なお、分析にはSPSS ver. 15を用いた。

調査の手続きにあたって、本研究は順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科倫理委員会の審査を通過しており、調査対象者には、文書及び口頭にて研究の目的や方法について十分に説明したのち、保護者並びに本人の署名をもって同意を得るものとした。

第2節 質問紙の構成

(1) 情報機器の利用に関する項目

インターネットの利用状況を把握するため、まず情報機器の有無について質問しており、情報機器を持っていると回答した者には、①持っている情報機器の種別をPC・携帯電話・スマートフォン・その他の選択肢、②情報機器の利用場所を自室・自室以外の家の中・図書館・漫画喫茶・その他の選択肢、③週当たりの利用時間、④利用しているウェブサービスについて15項目の中から選択(複数回答可)の通りに回答を得た。

(2) インターネット依存傾向尺度：戸部ら³²⁾

本研究では、戸部らがヤングの尺度項目を参考に、児童生徒の発達段階に合うよう項目を精選した11項目からなるインターネット依存傾向尺度を用いた。 $\alpha=0.92$ であり、十分な信頼性係数が確認された。項目に含まれる内容は、インターネットの長時間使用と、それによる心身・生活習慣・社会生活上の問題の発生、学業や人間関係といった現実社会の重要事項を軽視・無視する傾向、周囲からの問題の指摘、使用制限による離脱状況やそれに類する状態、現実問題からの逃避などである。回答は「よくある」(3点)、「時々ある」(2点)、「あまりない」(1点)、「ない」(0点)の4件法で求め、合計得点を出した。いずれの項目も、「よくある」と回答した者ほど依存傾向が高く、「ない」と回答した者ほど依存傾向が低いと考えられる。

(3) 家族機能測定尺度 (FACESⅢ): 草田・岡堂¹²⁾

日本語版 FACESⅢとは、草田・岡堂が Olson の FACESⅢを和訳したもので、現実と理想の家族機能を測定する質問紙である。草田によって、日本語版 FACESⅢの因子的妥当性は一応確認され、信頼係数も凝集性尺度が.80、適応性尺度が.77で、高い信頼性が認められている。特に凝集性尺度は安定性も十分高いとされている。草田の研究では、円環モデルのカーブリニア仮説は確認できなかったものの、凝集性尺度についてはリニアな尺度として、単独で用いることは十分可能であり、家族の健康と深くかかわっている凝集性の程度を測定する尺度としてかなり有効であると報告している。FACESⅢの利点として、①質問紙がわかりやすく、項目数が少ないので回答しやすいこと、②小学生から成人に至るまで幅広く適応できること、③様々な形態の家族(片親、同棲など)に応用できること、④臨床的実用が容易であること、⑤スコアリングが簡単、であることが挙げられる。

本研究では、日本語版 FACESⅢの凝集性・適応性のうち、凝集性の全10項目から構成されている質問紙を用いた。採点方法は、現時点での家族の機能(現実認知)について、それぞれ5段階評価させ(1点:まったくない、2点:たまにある、3点:ときどきある、4点:よくある、5点:いつもある)、その合計点を集計する。Olsonらは現実の家族機能における凝集性・適応性の両次元を4段階に分けるための基準を示している。本研究では、Olsonらに準じた日本語版 FACESⅢの分類基準である、遊離(10-24)、分離(25-31)、結合(32-38)、膠着(39-50)に則って凝集性を4段階に分割した。

なお、本研究では用いない家族機能の適応性と円環モデルに重要なカーブリニア仮説について説明する。なお、円環モデル図を図1に示す。

適応性は「状況的危機や発達の危機に対して、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力」と定義され、リーダーシップ、統制、しつけ、話し合い、役割関係、きまりなどの変数によって測定される。適応性も凝集性と同様に、高低の度合によって硬直(非常に低い)、構造化(低いから中間)、柔軟(中間から高い)、無秩序(非常に高い)の4つのレベルに分けられている。

コミュニケーションは、凝集性と適応性の両次元を促進させる働きを持ち、話題の一貫性、尊敬と信頼、明確さ、表現の自由、コミュニケーション技法などの変数によって測定される。コミュニケーションは凝集性と適応性がうまく機能するように促進

的な働きをする次元なので、凝集性と適応性のようには円環モデル上には図示されない。

円環モデルの重要な仮説の一つであるカーブリンニア仮説は、円環モデルにおける通常の家族生活では、きずな（凝集性）・かじとり（適応性）の両次元とも中庸でバランスの取れた段階にある時に家族機能度が最も高くなり、成員個人のパーソナリティーの成長や心理的安定がもたらされるとし、左右極端に向かうほど家族機能度が低くなるとされている²⁹⁾。

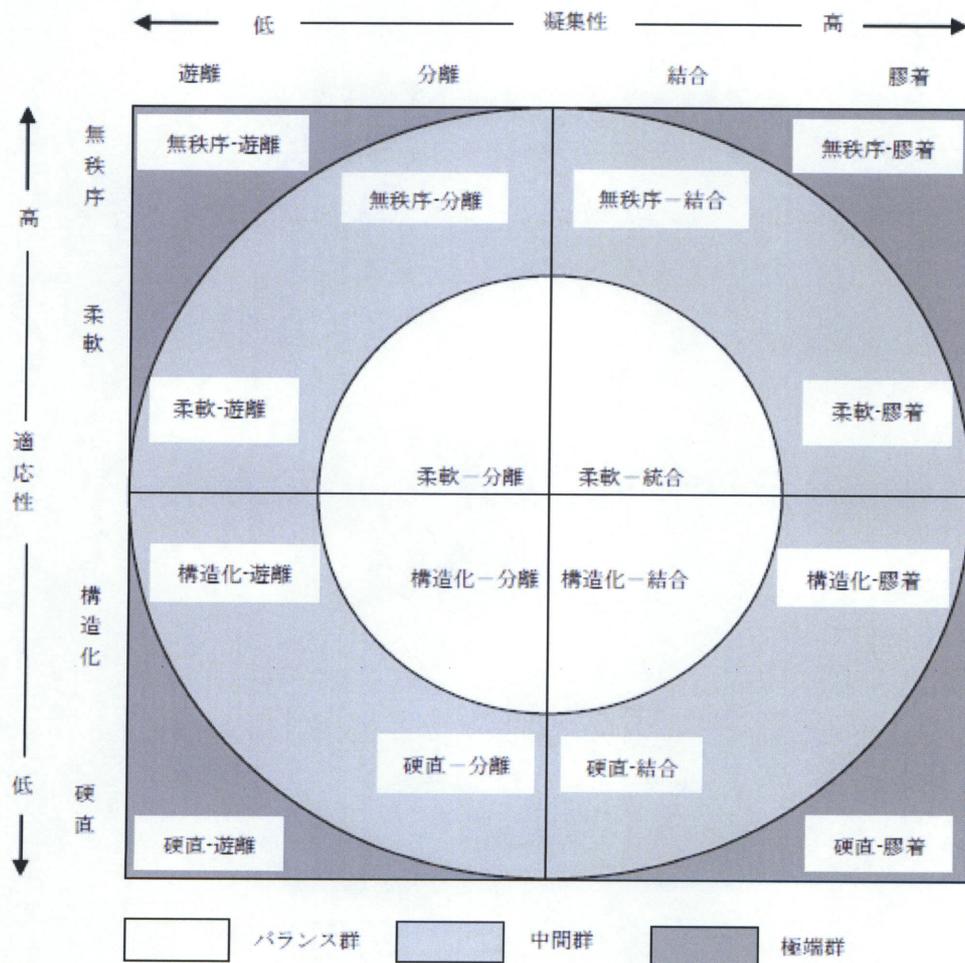


図1 円環モデル (Olson et al., 1985)

第5章 結果

第1節 生徒の情報機器所有とインターネット利用状況

(1) 情報機器の所有率と利用場所

表1に学年と性別でみた情報機器の所有率および主な使用機器を示す。

情報機器の所有率は1年生89%、2年生98%、3年生96%と学年があがるとともに所有率は増加し、2・3年生にもなるとほとんどの生徒が所有していた。全体での所有率は94%であり、男女差はなかった。所有する情報機器を、①PC、②携帯電話、③スマートフォン、④その他の4つで質問したところ、もっとも多かったのは①PCで73.3%、次いで②携帯電話で48.3%、③スマートフォンが14.4%となった。

表2にインターネット利用場所について示す。利用場所を、①自室、②自室以外の家の中、③図書館、④ネットカフェ、⑤その他の5つで質問したところ、②自室以外の家の中がもっとも多く59.4%、次いで②自室21.1%となった。

表1. 学年と性別でみたインターネット機器の所有率及び主な使用機器

		n	所有 (%)	使用機器		
				PC	携帯電話	スマートフォン
1年生	男性	27	22(81.4)	17(62.9)	4(14.8)	2(7.4)
	女性	28	27(96.4)	20(71.4)	16(57.1)	2(7.1)
2年生	男性	22	22(100)	17(77.2)	9(40.9)	4(18.1)
	女性	31	30(96.7)	21(67.7)	18(58.0)	8(25.8)
3年生	男性	35	33(94.2)	26(74.2)	14(40.0)	3(8.5)
	女性	37	36(97.2)	29(78.3)	26(70.2)	7(18.9)
計		180	170(94.4)	132(73.3)	87(48.3)	26(14.4)

表2. 学年と性別でみたインターネット機器の利用場所

		n	利用場所	
			自室	自室以外の家のなか
1年生	男性	27	6(22.2)	14(63.6)
	女性	28	3(10.7)	19(70.3)
2年生	男性	22	6(27.2)	14(63.6)
	女性	31	6(19.3)	20(64.5)
3年生	男性	35	9(25.7)	17(48.5)
	女性	37	8(21.6)	22(59.4)
計		180	38(21.1)	107(59.4)

(2) インターネット利用時間

図2と表3に、週当たりのインターネット利用時間を示す。インターネット利用時間の平均について、1年生は週6.2時間、2・3年生は6.8時間と差はなかった。インターネットを週20時間以上利用する生徒が全体の約7.1%に達し、特に3名は30時間以上のインターネット利用に達していた。

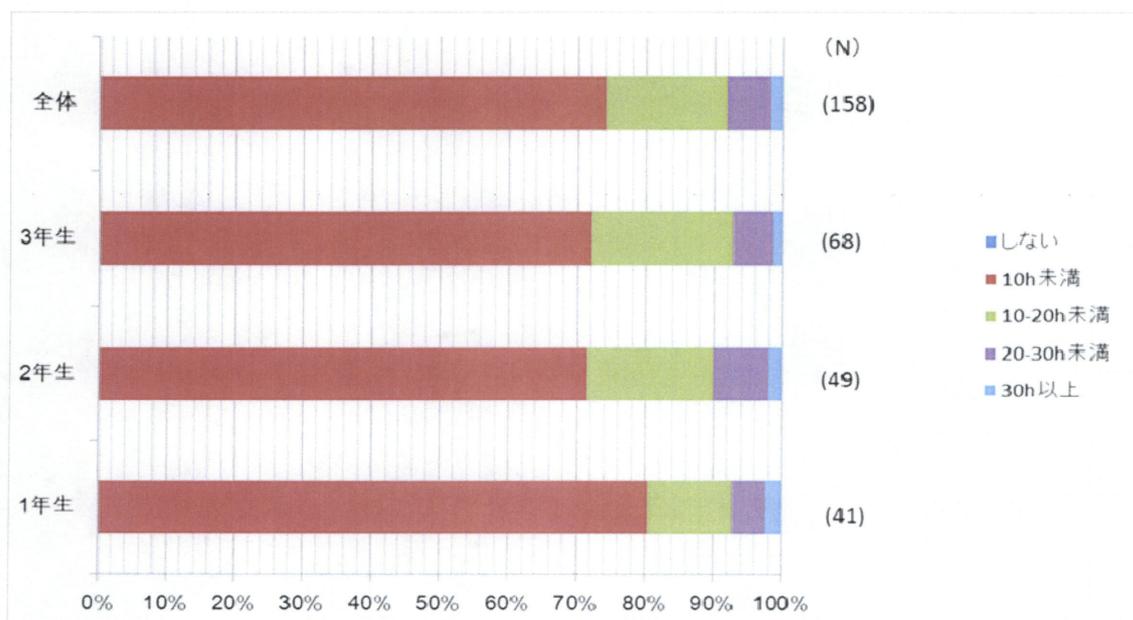


図1 生徒の週当たりインターネット利用時間

表3. 学年でみたインターネット利用時間

	n	利用時間				
		しない	10h未満	10-20h未満	20-30h未満	30h以上
1年生	55	14(25.5)	33(60.0)	5(9.1)	2(3.6)	1(1.8)
学年 2年生	56	7(12.5)	35(62.5)	9(16.1)	4(7.1)	1(1.8)
3年生	72	4(5.6)	49(63.9)	14(19.4)	4(5.6)	1(1.4)
計	180	25(13.9)	117(65.0)	28(15.6)	4(5.6)	3(1.7)

(3) 利用しているウェブサービス

インターネット利用率を表4に示す。インターネットを利用する生徒は、1年生の69.1%から2年生の85.7%、そして3年生の93.1%と学年があがるごとに増加した。全体で83.6%の生徒がインターネットを利用していた。インターネットを利用している者について利用しているウェブサービスを図3に示す。利用しているウェブサービス内容は、動画サイトが全体の66.7%、メールが53.9%、ホームページが51.7%となり、以上の3つのウェブサービスは過半数の生徒が利用していた。またSNSは33.9%、音楽配信サイトは31.7%、オンラインゲームは18.9%の生徒が利用していた。

表4. 学年でみたインターネット利用率

	n	インターネット利用 (%)
1年生	55	38(69.1)
学年 2年生	53	46(86.3)
3年生	72	67(93.1)
計	180	151(83.9)

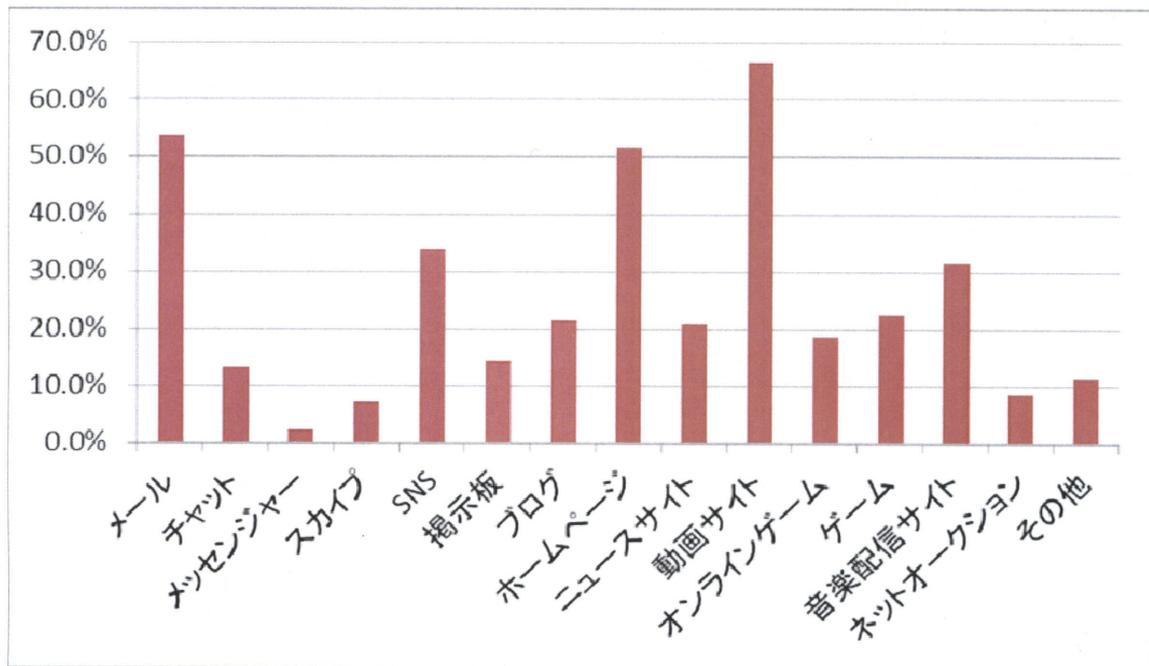


図3 利用しているウェブサービス

第2節 家族機能

(1) 学年・性別でみた凝集性

学年・性別でみた家族機能（凝集性）の比較を表5に示す。学年・性別においては有意な差が見られなかった。凝集性を4群に分けたところ、遊離の人数が19名と他の群に比べ割合少なかった。

表5. 家族機能（凝集性）得点の平均値と標準偏差

個人プロフィール		N	家族機能（凝集性）得点	
			Mean	SD
性別	男性	84	33.15	8.23
	女性	96	34.27	8.69
学年	1年生	54	34.78	8.49
	2年生	56	32.29	8.12
	3年生	72	33.92	8.56
家族機能（凝集性）	遊離	19	18.00	8.47
	分離	48	28.15	8.41
	結合	59	34.90	8.48
	膠着	51	43.41	8.48

第3節 インターネット依存傾向および家族機能とインターネット利用状況との関連

(1) 情報機器の種類別にみた関連

情報機器の種類別にみたインターネット依存傾向得点の比較を表 6-1 に、家族機能得点の比較を表 6-2 に示す。所持している機器の種類別でのインターネット依存傾向得点、また家族機能の比較では有意な差は見られなかったが、スマートフォンを所持している者のインターネット依存傾向得点の平均値が 9.69、中央値 7.0 と、PC・携帯電話を所持している者に比べもっとも高かった。

表6-1. インターネット機器によるインターネット依存傾向得点

使用機器	所持の有無	N	インターネット依存傾向得点		
			Mean	Median	SD
PC	所持している	132	7.88	6.0	6.92
	所持していない	48	7.77	6.0	7.19
携帯電話	所持している	87	8.24	6.5	6.95
	所持していない	93	7.48	6.0	6.92
スマートフォン	所持している	26	9.69	7.0	6.97
	所持していない	154	7.54	6.0	6.92

表6-2. インターネット機器による家族機能(凝集性)得点

使用機器	所持の有無	N	凝集性得点	
			Mean	SD
PC	所持している	132	34.30	8.10
	所持していない	50	31.90	9.09
携帯電話	所持している	87	33.49	9.02
	所持していない	95	33.78	7.89
スマートフォン	所持している	26	31.96	8.71
	所持していない	156	33.92	8.38

(2) 利用場所別にみた関連

利用場所別のインターネット依存傾向と比較を表 7-1 に、家族機能との比較を表 7-2 に示す。インターネット利用場所についてインターネット依存傾向得点および家族機能得点とで有意な差は見られなかった。

表7-1 . インターネット利用場所別によるインターネット依存傾向得点較

利用場所	N	インターネット依存傾向得点		
		Mean	Median	SD
自室	39	8.97	8.0	7.07
自室以外の家の中	107	7.50	5.0	6.94

表7-2 . インターネット利用場所別による家族機能 (凝集性) 得点

利用場所	N	凝集性得点	
		Mean	SD
自室	39	32.67	8.59
自室以外の家の中	107	34.58	7.83

(3) ウェブサービス別にみた関連

ウェブサービス別にみたインターネット依存傾向の比較を表 8 に示す。利用しているウェブサービスについて、インターネット依存傾向得点は、チャット ($p < 0.001$)、SNS ($p < 0.001$)、ブログ ($p < 0.001$)、動画サイト ($p < 0.001$)、ネットオークション ($p < 0.001$)、ホームページ ($p < 0.01$)、オンラインゲーム ($p < 0.01$)、掲示板 ($p < 0.05$)、ゲーム ($p < 0.05$) において有意な差が見られた。また、ウェブサービス別にみた家族機能の相関を表 9 に示す。家族機能得点は、SNS ($p < 0.01$)、メール ($p < 0.05$) において有意な差が見られた。

表8. 利用ウェブサービス別によるインターネット依存傾向得点

利用ウェブサービス	利用の有無	N	インターネット依存傾向得点		U値	
			Median			
チャット	利用している	24	10.5]	1,087.50	***
	利用していない	156	5.0			
SNS	利用している	61	9.0]	2,341.50	***
	利用していない	119	5.0			
掲示板	利用している	26	9.5]	1,407.50	*
	利用していない	153	6.0			
ブログ	利用している	39	11.0]	1,568.00	***
	利用していない	141	5.0			
ホームページ	利用している	93	8.0]	3,149.00	**
	利用していない	87	5.0			
動画サイト	利用している	120	7.0]	2,288.00	***
	利用していない	60	4.0			
オンラインゲーム	利用している	34	8.5]	1,645.00	**
	利用していない	146	5.0			
ゲーム	利用している	41	7.0]	2,205.00	*
	利用していない	139	5.0			
ネットオークション	利用している	16	13.0]	640.00	***
	利用していない	163	5.0			

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

表9. 利用ウェブサービス別による家族機能得点

利用ウェブサービス	利用の有無	N	家族機能 (凝集性) 得点			
			Mean	SD		
メール	利用している	97	32.25	8.574]	*
	利用していない	85	35.24	8.014		
SNS	利用している	61	30.77	7.883]	***
	利用していない	121	35.09	8.353		

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

第4節 インターネット依存傾向と家族機能との関連

(1) 性別・学年別にみた関連

表10は、インターネット依存傾向得点と学年・性別および家族機能との比較である。インターネット依存傾向得点について、性別および学年で有意な差は見られなかったが、インターネット依存傾向得点は学年があがるにつれ増加していた。

表10. 性別・学年別によるインターネット依存傾向得点の比較

個人プロフィール		N	インターネット依存傾向得点		
			Mean	Median	SD
性別	男性	83	7.51	6.0	7.30
	女性	95	8.13	5.0	6.64
学年	1年生	54	6.74	5.0	5.65
	2年生	55	7.89	6.0	7.31
	3年生	72	8.54	6.5	7.49

(2) インターネット依存傾向と家族機能との関連

表11にインターネット依存傾向と家族機能、各プロフィールとの相関係数を示す。インターネット利用時間について、インターネット依存傾向得点間において有意 ($p < .05$) であり、相関係数は $r = 0.54$ であった。しかし、インターネット利用時間と家族機能との関連は見られなかった。

インターネット依存傾向と家族機能（凝集性）との関連は見られなかった。相関係数は $r = -0.13$ であった。

表11. 個人のプロフィール別による
インターネット依存傾向得点の相関係数 (r)

個人プロフィール	N	インターネット依存傾向得点	
性別	178	0.079	ns.
学年	181	0.087	ns.
利用時間	158	0.538	***
家族機能 (凝集性)	181	-0.130	ns.

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

(3) 凝集性の4群別での比較

表12・図4に凝集性の4群別によるインターネット依存傾向得点の比較を示す。凝集性得点について、性別および学年の差は見られなかった。インターネット依存傾向得点と凝集性および凝集性の4群との相関を検定したが、いずれにおいても有意ではなかったものの、インターネット依存傾向得点が遊離で最も高く、膠着で最も低い結果となった。

表12. 凝集性の4群別によるインターネット依存傾向得点の比較

家族機能	N	インターネット依存傾向得点			
		Mean	Median	SD	
凝集性	遊離	19	9.32	7.0	7.07
	分離	48	8.10	7.0	6.37
	結合	58	8.41	5.0	7.84
	膠着	50	6.60	5.0	6.61

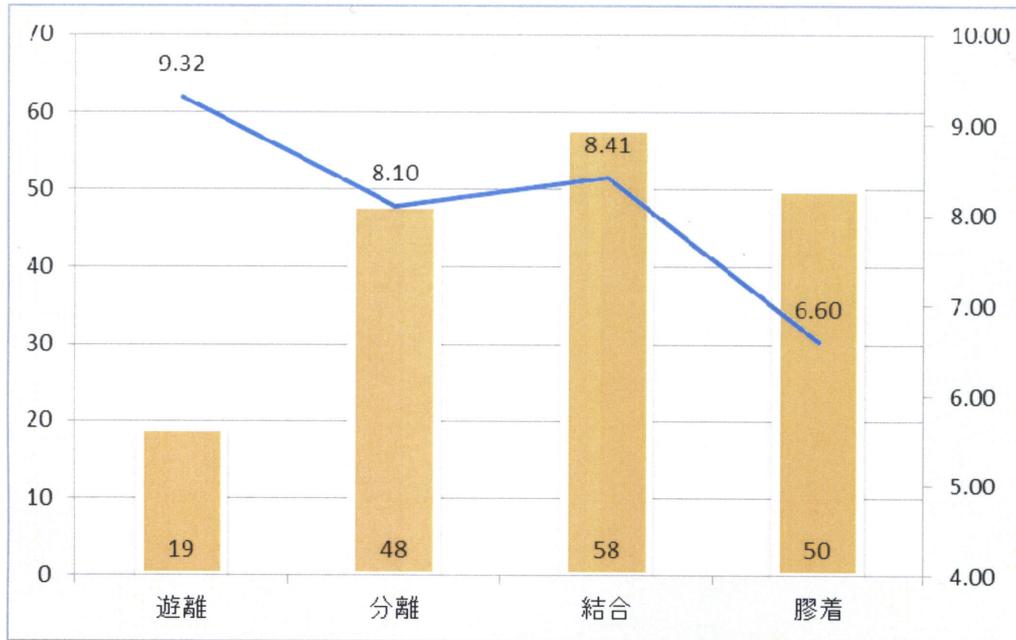


図4 凝集性の4群とインターネット依存傾向得点の平均値

(4) 項目別にみた関連

表13にインターネット依存傾向項目と凝集性項目の相関係数(r)を示す。インターネット依存傾向項目の「家族と一緒にいるよりインターネットの方が楽しいと感じる」については、凝集性および凝集性項目が負の相関で有意(それぞれ、 $p < .05$, $p < .01$)であり、家族と一緒にいるよりインターネットの方が楽しいと感じている者ほど凝集性が弱い傾向が見られた。

また、凝集性項目の「家族で何かをする時は、みんなでやる」と「私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく」については、依存傾向得点の合計点と負の相関で有意($p < .05$)であり、家族みんなで行動しないと感じている者ほど、また、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつかないと感じている者ほど、インターネット依存傾向が高くなることが見られた。

表 13. インターネット依存傾向項目No2. 「家族と一緒にいるより
インターネットの方が楽しいと感じる」と凝集性項目との相関係数 (r)

No	凝集性の項目	インターネット依存傾向得点	
		No.2	合計点
1	私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。	-0.18 *	
2	家族は、それぞれの友人を気に入っている。	-0.22 **	
3	私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。	-0.30 **	
4	家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。	-0.30 **	
5	私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。	-0.24 **	
6	私の家族は、お互いに密着している。	-0.22 **	
7	家族で何かをする時は、みんなでやる。	-0.31 **	-0.166 *
8	私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。	-0.32 **	-0.172 *
9	私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。	-0.21 **	
10	家族がまとまっていることは、とても大切である。	-0.27 **	
		合計	-0.33 **

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

第6章 考察

第1節 中学生のインターネット利用状況

(1) 情報機器の所持率およびインターネット利用率

通信機器の普及が全体的に飽和状況の中、スマートフォン保有が顕著に伸びている²⁵ことから、本研究ではスマートフォンを含めた情報機器の所持について回答を得た。国内のスマートフォン保持率は29.3%に対し、本研究の対象とした中学生は14.4%であり、中学生においても保持している生徒が少なからずいることがわかる。また、スマートフォンを所持している者のインターネット依存傾向得点が、PC・携帯電話を所持している者に比べもっとも高かったことから、今後スマートフォンの利用者が増えていくことも見据え、インターネット依存についての研究においてスマートフォンに着目する必要があると考えられる。

通信動向調査のインターネット利用率を年齢階級別にみると、6-12歳の61.6%から13-19歳の96.4%へと大きく増加していることが見て取れる。本研究の結果では、インターネット利用率が1年生の69.1%から3年生の93.1%へと増加しており、通信動向調査の結果に近い数値であった。対象者の地域などの環境は農村部に囲まれ自然に恵まれており、都内とは少し異なった環境ではあるが、情報機器の所持やその利用者の多さが、環境を隔たない情報化の広がりを感じさせる。

インターネット利用時間について、児童生徒を対象とした研究³²⁾では、週20時間以上行う長時間使用者はすでに小学校高学年から見られ、高校生になると10%前後に達し、さらに週30時間以上のきわめて長時間の利用者も小学生から中学生にかけて出現し、高校2年生では5-9%に達していた。本研究の結果では、週20時間以上の利用者が7.1%存在し、特に3名もの生徒が週30時間以上ものインターネット利用に達していたことは、本研究においても先行研究同様、中学生においても長時間のインターネット利用者が存在する可能性を示している。

(2) 利用場所および利用時間との関連

本研究ではインターネット利用場所とインターネット依存傾向および家族機能との関係性を検討し、利用場所について回答を得たが有意な結果は得られなかった。利用時間と家族機能との関連も見られなかったが、インターネット依存傾向と利用時間には有意な相関が見られた。

戸田ら²⁸⁾は「インターネットの使用とメンタルヘルスおよび心理・社会的変数間の関連性は明確であるが、それは単なる長時間の使用というよりむしろ、インターネット依存傾向が介在することによって生じる問題性」とし、使用時間以上に依存傾向に着目する必要性を挙げている。

しかし、中学生の自室滞在時間や自室内テレビの視聴時間の長さが父親との関係の希薄化につながり、父親との関係形成に影響を及ぼしていることを明らかにした報告¹⁸⁾もある。つまり、自室における長時間のインターネット利用が家族とのコミュニケーションの減少を起こしている可能性も考えられることから、あながち利用時間も軽視できない。

(3) ウェブサービスとの関連

利用しているウェブサービスについて、特にチャット、SNS、ブログ、動画サイト、ネットオークションに有意な差が見られ、以上のウェブサービス利用者は利用していないものと比べ、インターネット依存傾向得点が高い傾向が示唆された。

ネット依存の類型化をした研究^{3) 23)}によると、①チャットやオンラインゲームなど、利用者同士がリアルタイムにコミュニケーションを行うことを前提としたウェブサービスへの依存症状を「リアルタイム型ネット依存」②ブログ・BBS・SNSへの書き込みやメール交換など、利用者同士がメッセージを交わし合うウェブサービスへの依存症状を「メッセージ型ネット依存」③ネット上の記事や動画などのコンテンツなどを、受信のみで成立する一方向サービスへの依存症状を「コンテンツ型ネット依存」としている。

本研究で得たウェブサービスの結果に当てはめると、①「リアルタイム型ネット依存」よりも②「メッセージ型ネット依存」や③「コンテンツ型ネット依存」の割合が多く存在していた。特に本研究では動画サイトやホームページの利用者が多く見られ、さらに有意な差が見られたことから、中学生において③「コンテンツ型ネット依存」がもっとも多いのではないだろうかと考えられる。中学生を対象としたパネル調査では、オンライン上の活動に縛り付けられるほど強い熱中によるネット依存というよりは、娯楽や情報収集などにより漠然と時間を浪費するタイプのネット依存の存在が多いことを指摘しており、本研究も先行研究を支持した結果となった。

一方、家族機能とでは、SNSとメールに有意な差が見られ、SNSやメールを利用している者ほど利用していない者に比べ凝集性が弱い傾向にあった。この結果からは、SNS

やメールを利用している場合、家族ではない相手や家族の知らない相手とのコミュニケーションツールとして用いている場合、家族の凝集性に良い影響を及ぼさないことが考えられる。

第2節 中学生が視る家族機能

凝集性の4群をみると、遊離の割合が他の群に比べ少なく、割合結合に寄っていた。発達段階でみれば親から分離していく過程に入る時期ではあるが、結合を境目に分離と膠着に分かれていることから、親からの独立と依存の葛藤を経験している時期であるように感じ取れる。

加藤⁷⁾は、親子関係の観点から現在の家庭をみると、小規模化、核家族化により家庭内の人間関係が単純化し、特にきょうだい数の減少は親と子が直接結びつく形を進行させており、加えて、外での人間関係は人格的結合が希薄になっているので、どれを補う形で親と子が情緒的に融け合おうとする気持ちが強いため、親子関係が予想以上に密接になっていると述べる。また、近年では親子関係に関して親への反抗よりもむしろ親との情緒的結びつきの強化が指摘されている³³⁾。

本研究の結果からも、家族が密接になっている現状を読み取ることができる。また、時代とともに家族の家族機能に変化しその形は多様であることから、今後も家族の変化を把握するために、家族機能の調査も絶えず行う必要がある。

第3節 インターネット依存傾向と家族機能との関連

(1) 性別・学年別

インターネット依存傾向得点は学年があがるにつれ増加していた。戸田らの研究³²⁾では中学・高校生のインターネット依存傾向得点の平均が7.4であったのに対し、本研究では中学生で7.8であり先行研究と近い数値であった。本研究においても、中学生の段階で高いインターネット依存傾向の者が存在することを示した。

20歳以上を対象とした調査²⁴⁾では、男女差が小さかったという報告がある。インターネット依存の尺度が異なるため比較はできないが、男女差が小さいという結果は本研究と近い結果であり、男女関係なくインターネット依存傾向になる可能性を示していると考えられる。

インターネット依存が若年層に頻度が高いという報告²⁴⁾と、成人におけるインター

ネット依存者と同等レベルまたはそれ以上の時間インターネットを利用している者がすでに小学生段階から見られ、高校生では相当数存在する可能性を示した報告³²⁾があることから、大人だけでなく子どもにもインターネット依存傾向になる可能性が大いにあることを示している。

(2) 凝集性との関連

インターネット依存傾向得点と家族機能の凝集性とで有意な差は見られなかったが、遊離がもっとも高く、膠着がもっとも低い結果となっていた。アルコール依存症の患者がいる家族と問題のない家族を比較した研究²²⁾では、アルコール依存症患者をもつ家族の21%が極端群であったのに対し、問題のない家族ではわずか4%しか極端群に位置していなかったと報告している。また、アルコール依存症家族システムの特性を清水²⁵⁾は「バラバラな状態が硬直化している」と報告している。本研究では明らかに出来なかったが、遊離においてインターネット依存傾向がもっとも高かったことは、今後注目すべき要点であろう。

尺度項目との関連をみたところ、家族と一緒にいるよりインターネットの方が楽しいと感じている者ほど凝集性が弱い傾向が見られた。保護者を対象とした調査³⁷⁾では、家庭・親子関係と個々の依存傾向との関連のなかで、「家族と一緒に過ごすよりインターネットにつなぐ方を好んで選ぶことがある」という項目で、最も相関係数の絶対値が大きくなっている点に注目し、保護者と子どもとのコミュニケーションがうまくとれておらず、また保護者が子どものありのままの姿を認めていない場合、家族から離れインターネットに逃避する傾向が強くと示唆している。よって先行研究の保護者の視点からも本研究の中学生の視点からも、インターネット依存傾向項目の「家族と一緒にいるよりインターネットの方が楽しいと感じる」と家族との関連があることが示唆された。

さらには家族みんなで行動しないと感じている者ほど、またみんなで一緒にしたいことがすぐに思いつかないと感じている者ほど、インターネット依存傾向が高い傾向が見られた。

以上の結果から、インターネット依存傾向と家族機能（凝集性）との関連は見られなかったものの、インターネット依存傾向が高い者と家族との関係に負の関連があることが示され、インターネット依存傾向の問題は子どものみならず、その家族も抱える問題でもあることを示唆している。

第4節 今後の課題

本研究からも先行研究同様にインターネット依存傾向は、成人のみならず子どももなりうる可能性があることが示された。しかし、本研究の目的であるインターネット依存傾向と家族機能との関連が見られなかった。本研究においては、中学生の視点で検証を行ったが、今後は家族の視点、とりわけ両親からの視点もみる必要があるのではないだろうか。

Young³⁶⁾は、「アルコール中毒、薬物依存、ギャンブル中毒、過食といった例では、まず中毒者と一緒に暮らす人びとがその問題に気づき、本人よりもずっと積極的に解決の手段を見つけようと努力することが多い。インターネット中毒者の家族についても同じことが言える」と述べている。Youngが述べるように、当事者よりも問題点に気づき、現状を把握しているのであれば、対象を中学生だけでなくその家族、主に両親も対象にすべきではなかっただろうか。

また、財団法人コンピュータ教育開発センター³⁷⁾は「インターネット依存傾向について児童生徒自身が自覚している程度に比べ、保護者の認識は十分ではない。しかし、保護者は子どもにインターネット依存傾向がみられる場合、それをまったく看過しているわけではなく、一定の危機意識は抱いている。急速に進展する情報化のなかで、それに素早く適応していく子どもに対し、保護者の認識・対応はつねに後手にまわらざるをえなくなっているという現状がみてとれる」と述べている。

わが国におけるインターネット依存傾向の研究の問題点は、家族を対象とした研究は極めて少なく、現状を把握するための情報が足りていない点である。インターネット依存傾向の子どもとその家族に対する支援や対策を早急に講じるためにも、今後インターネット依存に関する子どもとその家族を対象とした研究の蓄積が望まれる。今後の課題として、子どものみならず家族を、とりわけ両親を対象とすることや、一時点ではなく横断的な研究を行うことが挙げられる。以上によって、インターネット依存傾向と家族との関連をより明らかにできると考えられる。

本研究の限界性として、家族機能測定尺度が家族のプライベートなところを質問している内容であることから、対象者及びその家族に言葉の意味違いや誤解を生じる危険性があるとし、対象校から家族機能の適応性を使用することの同意が得られず、本研究の調査が家族機能の凝集性のみの使用に至った。今後の課題として、インターネ

ット依存傾向と家族との関連をより検討するため、家族機能の凝集性のみならず適応性とともに用いるほかに、現代社会において家族に関する質問紙の再検討も必要になってくると考えられる。

第7章 結論

本研究では、中学生の情報機器の所持から利用状況について状況把握し、インターネット依存傾向と家族機能との関連を検討した。その結果、中学生の段階ですでに多数の生徒が情報機器を所有し、長時間使用者もすくなく存在することがわかった。利用するウェブサービスによってインターネット依存傾向が高くなることが示唆された。

本研究の目的であるインターネット依存傾向と家族機能との関連は見られなかったものの、凝集性項目との関連が見られ、インターネット依存傾向が高い者と家族との関係に負の関連があることが示された。

文献

- 1) 安藤玲子・高比良 美詠子・坂元 章(2005) : インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響. パーソナリティ研究 14(1), 69-79
- 2) Goldberg, I. (1996). Internet addiction. Electronic message posted to research discussion list. www.rider.edu/user/suler/psyber/supportgp.html
- 3) 堀川裕介・橋元良明・小室広佐子・小笠原盛浩・大野志郎・天野美穂子・河井大介(2012) : 中学生パネル調査に基づくネット依存の因果的分析. 東京大学大学院情報学環情報学研究. 調査研究編 28, 161-201”
- 4) 妹尾栄一(2005) : 精神医学用語解説(294) インターネット依存症. 臨床精神医学 34(4), 517-519
- 5) Joinson, AN(2003) : Understanding the Psychology of Internet Behavior: Virtual Worlds, Real Lives. Palgrave Macmillan. (三浦麻子/畦地真太郎/田中淳 (訳) インターネットにおける行動と心理-バーチャルと現実のはざままで- 北大路書房 2004.)
- 6) 片山理恵・内藤直子(2011) : 乳幼児をもつ母親, 父親の家族機能と子育て支援. 女性心身医学 15(3), 294-304
- 7) 加藤隆勝 (1987) : 青年期の意識構造 誠信書房
- 8) 北島 歩美 (1994) : 思春期の子どもの変化に伴う家族の変化 . 東京大学教育学部紀要 33, 125-133
- 9) 小林久美子・坂元章・足立にれか・内藤まゆみ・井出久里恵・坂元佳・高比良美詠子・米澤宣義 (2001) 大学生のインターネット中毒—中毒症状の分布と関連する要因の検討—日本心理学会第 65 回大会発表論文集 863”
- 10) Kraut, R., Patterson, M., Lundmark V., Kiesler, S., Mukopadhyay, T., and Scherlis, W. (1998) : Internet Paradox: A Social Technology that Reduce Social Involvement and Psychological Well-Being? American Psychologist 53 1, 1017_1031
- 11) 草田寿子(1995) : 日本語版 FACES3 の信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究 28(2), p154-162
- 12) 草田寿子・岡堂哲雄(1993) : 家族関係査定法 (岡堂哲雄編 心理検査学) . 垣内出版 573-581

- 13) 三宅義和(2012) : 家族機能が青年期危機に及ぼす影響について. 神戸国際大学紀要 第 83 号
- 14) 文部科学省 (2009) : 「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」子どもの徳育に関する懇談会 (第 11 回) 配付資料
- 15) 文部科学省 (2008) : 「教育の情報化に関する手引」作成検討会 (第 3 回) 配付資料
- 16) 茂木千明(2007) : 健康な家族機能に対する家族の評価. 仙台白百合女子大学紀要 11, 65-80
- 17) 村野井均・王勇 (2008) : 家庭的要因から見た中国青少年のインターネット依存. 茨城大学教育学部紀要. 教育科学 (58), 295-305, 2009-03
- 18) 長津美代子(2000) : 中学生がいる家族の個別化と凝集性—先行研究と「情報機器の個別所持に関する調査」から—. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 (35), 247-270, 2000
- 19) 内藤まゆみ・坂元章・毛利瑞穂・木村文香・檀淵めぐみ・小林久美子・安藤玲子・鈴木佳苗・足立にれか・高比良美詠子・坂元桂・加藤祥吾・坂元昇(2001) : 学校におけるインターネットの活用が生徒の情報活用の実践力に及ぼす効果—中学生の準実験による評価研究—. 日本教育工学雑誌 25(2), 63-72
- 20) Olson, D. H, Russell, C. S., & Sprenkle, D. H. 1983 Circumplex model IV: Theoretical update. Family Process, 22, 69-83.
- 21) Olson, D. H., Bell, R., & Portner, J. (1978). FACES: Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales. ST. Paul: Family social Science, University of Minnesota
- 22) Olson, D. H., McCubbn, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. 1985 Family Inventories. St. Paul, MN: Fsmily Socisl Science, University of Minnesota.
- 23) 大野志郎・小室広佐子・橋元良明・小笠原盛浩・堀川 祐介(2011) : ネット依存の若者たち、21 人インタビュー調査. 東京大学大学院情報学環情報学研究. 調査研究編 27, 101-139”
- 24) 尾崎米厚・樋口進・松下幸生・岸本拓治 (2009) : わが国の成人における問題飲酒、ニコチン依存、インターネット依存、ギャンブル依存の頻度と相互関係. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 = Japanese journal of alcohol studies & drug

dependence 44(4), 380-381, 2009-08-28

- 25) 清水新二：アルコール依存症と家族. 培風館
- 26) 曾田邦子・高瀬さおり・中安裕子 (1992). : 「家族システムの視点からみた中学生の無気力と家族関係：オルソン円環モデルに準拠して」『関西学院大学社会学部紀要』, 66、159-164.
- 27) 総務省 (2012) :通信利用情報調査 統計調査データ.
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>
- 28) 高比良美詠子・安藤玲子・坂元章(2003) : ネット使用が精神的健康および社会的不適応に与える影響. 日本社会心理学会第44回大会(東洋大学) 発表論文集, 620-623
- 29) 立木茂雄(1999) : 家族システムの理論的・実証的検証—オルソンの円環モデル妥当性の検討. 川島書店
- 30) 鄭艶花(2008) : インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究. 心理臨床学研究 26(1), 72-83
- 31) 鄭艶花・野島一彦(2008) : 大学生の<インターネット依存傾向プロセス>と<インターネット依存傾向自覚>に関する実証的研究(臨床系). 九州大学心理学研究 9, 111-117
- 32) 戸部秀之・竹内一夫・堀田美枝子 (2010) : 児童生徒のインターネット依存傾向とメンタルヘルス、心理・社会的問題性との関連. 学校保健研究 52(2), 125-134, 2010-06
- 33) 山田順子 (1988) : 青年期の母子関係 心理学評論, 31, 88-100
- 34) 吉野聡・笹原信一朗・立川秀樹・服部訓典・飛鳥田菜美・森田展彰・松崎一葉・吉川麻衣子 (2005) : 家族機能と思春期問題発症との関連に関する研究 : 筑波研究学園都市における5年毎の横断調査結果より(第5報). 思春期学 = ADOLESCENTOLOGY 23(2), 234-242
- 35) Young K (1998) : Internet addiction: The emergence of a new clinical disorder. Cyber Psychology Behavior 1 :237-244
- 36) Young, K. (1998) : Caught in the Net: how to Recognize the Signs of Internet Addiction—and a Winning Strategy for Recovery. John Wiley & Sons. 小田嶋由美子訳インターネット中毒. 毎日新聞社 1998

- 37) 財団法人コンピューター教育開発 センター(2003) : 『平成 14 年度文部科学省 学校における IT 活用等の推進に係る事業 (情報教育の改善に資する調査研究) 委託事業「情報化が子どもに与える影響 (ネット使用傾向を中心として)」に関する調査報告書』 . http://www.cec.or.jp/books/H13/1/report_H13.pdf

謝辞

本研究の作成にあたり、ご指導いただきました島内憲夫教授、審査にご協力いただきました田中純夫先生准教授、山岸明子教授、また、調査にご協力いただきました千葉県白井市立七次台中学校中嶋敏校長をはじめ諸先生方や生徒の皆さまに、深く感謝申し上げます。

The Relationship between Tendency Toward Internet Dependence and Function of the Family

Kenta Hiratsuka

Summary

The bad influence of the Internet is a problem which cannot be overlooked not only in an adult but in a child. In recent years, "the Internet dependence" attracts attention. The increase in people who start the social awkwardness by the Internet dependence is as a social concern in the United States and South Korea which are called Internet advanced nations.

From the previous study, it has been reported that there is relation between the Internet dependence tendency and a family. There are very few study examples which verified relation with a family, and little attention has been given to a function of family. Various problems, such as bullying, wrongdoing, and alcohol dependence, are the viewpoints of the family therapy study that it is not only a mere personal problem but the whole family's problem. That is, if it transposes to the Internet dependence, a possibility that the Internet dependence is reflecting the problem with a family can be considered.

This paper is an attempt to clarify the relation between the Internet dependence tendency and function of the Family

The composition of a questionnaire is possession of information machines and equipment and the item about a use situation, and the Internet dependence tendency measure and Olson's FACESIII (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III) for Japanese.

Many students own information machines and equipment in a junior high school

student's stage. Although it was a small number, those who use for a long time existed. It was suggested that the Internet dependence tendency becomes high by the web service to be used. It is possible for adult and child to be Internet dependence tendency. And it is the relation between Internet dependence tendency and the family. So we need to accumulate the research of the child between Internet dependence and function of family.

The relation of the Internet dependence tendency and function of the family was not seen. However, the Internet dependence tendency was relation with an item of Cohesion, it was shown that the relation between a person with the high Internet dependence tendency and a Cohesion of the family has negative relation.